

中野区教育委員会会議録

令和4年第15回定例会

令和4年5月27日

中野区教育委員会

令和4年第15回中野区教育委員会定例会

○日時

令和4年5月27日（金曜日）

開会 午前10時00分

閉会 午前11時15分

○場所

中野区立明和中学校

○出席委員

教育委員会教育長 入野 貴美子

教育委員会委員 岡本 淳之

教育委員会委員 村杉 寛子

教育委員会委員 田中 英一

教育委員会委員 伊藤 亜矢子

○出席職員

教育委員会事務局次長 青山 敬一郎

参事（子ども家庭支援担当） 小田 史子

子ども・教育政策課長、学校再編・地域連携担当課長

濱口 求

指導室長 齊藤 光司

学校教育課長 松原 弘宜

明和中学校長 熊谷 恵子

鷺宮小学校長 高橋 俊之

○書記

教育委員会係長 香月 俊介

教育委員会係 伊藤 芽依

○会議録署名委員

教育委員会教育長 入野 貴美子

教育委員会委員 岡本 淳之

○傍聴者数

7人

○議事日程

1 協議事項

(1) 学校と地域との関わりについて

○議事経過

午前 10 時 00 分開会

入野教育長

それでは、定足数に達しましたので教育委員会第 15 回定例会を開会いたします。

本日の会議録署名委員は、岡本委員にお願いいたします。

本日の議事は、お手元に配付の議事日程のとおりでございます。

ここで、お諮りいたします。

本日は株式会社ジェイコム東京から、取材のため、教育委員会の会議を撮影したい旨の申し出がございました。

会議を撮影する場合には、教育委員会の承認を受ける必要があります。

これを承認したいと思いますが、いかがでしょうか。

(「異議なし」と呼ぶ者あり)

入野教育長

ご異議ございませんので、会議の撮影を承認することに決定しました。

なお、撮影に当たりましては、会議に差し支えないように行っていただきますようお願いいたします。また、傍聴者の方を撮影される場合には、個別に了承を得てから行っていただきますよう、お願い申し上げます。

さて、本日開催いたします地域での教育委員会は、中野区において開かれた教育行政を一層推進するために、区役所以外の場所に会場を移して開催しているものでございまして、今回で 39 回目の開催となります。

会議の進行につきましては、通常の教育委員会と同じように進めてまいります。本日の協議事項の「学校と地域との関わりについて」につきましては、テーマに関連して、小・中学校の校長先生にお話を伺う予定でございます。よろしくをお願いいたします。

また協議事項の終了後、会議を一旦休憩し、協議テーマ、その他教育に関して、傍聴の方のご意見をいただく時間を設けたいと思いますのでよろしくをお願いいたします。

それでは、議事に入ります。

<協議事項>

入野教育長

協議事項、「学校と地域との関わりについて」を協議いたします。

初めに、指導室長から、区の取組についてお話をいただき、その後、小・中学校の校長先

生方から取組等を紹介していただいた後、教育委員の先生方からご意見を伺い、協議を進めてまいりたいと思います。

初めに、事務局から説明をお願いいたします。

指導室長

それでは、中野区立学校と地域の連携について説明させていただきます。

中野区では、基本構想、10年後に目指す姿「つながる はじまる なかの」の中に、四つの姿が示されております。

その中の二つ目の姿に、「未来ある子どもの育ちを地域全体で支えるまち」がございます。そこには、「子どもたちは、未来に向けて、チャレンジしながら成長しています。子育て家庭は、地域社会に支えられ、安心して子育てをしています。子どもの育ちを、未来の希望として、地域全体で支えるまちを築いていきます。」と書かれております。

また、全ての小・中学校の教育目標や基本方針の中には、地域社会との連携が明記されております。地域の方々と連携したり、学校の教育活動に参画していただいたりすることで、子どもたちに社会貢献の精神を育成することや社会性の育成、規範意識の高揚、地域社会の一員としての自覚を持たせることなどを目指しております。

ここ明和中学校では、地域の方々や保護者と一体となり、実践的な防災教育や防犯教育の推進も行っているところでございます。

その他中野区では、多くの教育活動に、地域の方々にご協力をいただいております。地域、学校が一体となって、地域ぐるみで子どもたちの生きる力を育むとともに、地域に開かれた特色ある学校づくりを推進しております。本日は、その一部をご紹介します。画面のほうをごらんください。

1点目は、授業・補習教室でのボランティアティーチャーでございます。

習字や木工制作、ミシン等の授業で補助をお願いしていたり、算数少人数授業に地域の方に加わっていただいて、学習を支援していただいたり、また社会科の「地域の昔を調べよう」という授業では、ゲストティーチャーとしてご参加いただき、昔の話をさせていただいております。

放課後の学習教室や補習教室等では、小学生に学習習慣を身につけさせたり、学力向上に向けた支援をお願いしております。また、お手玉、羽根つき、けん玉、コマ回し、あやとり、めんこ、おはじきなど、昔遊びを地域の方々に直接教えていただくといったような活動も行っております。

2点目は、読書活動推進に向けた本の読み聞かせ等です。

小学生を対象に、読み聞かせを実施していただいたり、教員や図書館指導員と連携した読書活動の充実や環境整備などをお願いしております。また、子どもたちに読書の楽しさを実感させるとともに、語彙や想像力を身につけさせるような取組につながっております。

最後3点目は、中学校で行っている職業調べや職場体験です。

地域で働く方々から講話等で職業について学んだり、中学生が地域社会の様々な事業所で職場体験を実施すること。生徒たちが地域の事業所などで働き、地域の方々と接することを通して、職業や仕事の実際について体験したり、働くことの意義を実感したりしてございます。

今後も学校と地域の方々との連携により、教育活動のより一層の充実を目指してまいります。

雑駁ではございますが、私からの説明は以上でございます。

入野教育長

続きまして、本日の会場である明和中学校の熊谷校長先生からお話をお伺いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

熊谷校長

おはようございます。中野区立明和中学校校長、熊谷と申します。よろしくお願いいたします。

今日は「学校と地域との関わりについて」をテーマに、副主題としまして、「子供たちの自己有用感を高め、社会貢献意識を育むために」ということでお話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

まず初めに、学習指導要領の前文に、「自分のよさや可能性を認識し、共生的な市民社会の一員として育つためには、多様な人々との関わりが不可欠」とあります。しかし、現代社会におきましては、SNS等の急速な普及により、他者との直接的なつながりが希薄化しております。さらに、長引くコロナ禍が、その傾向に拍車をかけていると考えます。

そうしたことから、自分のよさに気づいたり、人としての生き方を学んだりする機会が、残念ながら減少している状況があります。だからこそ、学校は、地域社会との連携及び協働により、子どもたちの自己有用感や社会貢献意識を醸成するための教育活動を一層充実させていくことが重要であると考えます。

さて、「自己有用感」「自己肯定感」よく使われますけれども、何が違うのかということ

なのですが、「自己肯定感」については、文字どおり自己に対する肯定的な評価であり、自分の気持ちの持ちようでも高めていくことも可能です。

一方、「自己有用感」は、人の役に立った、人から感謝された、認められたというように、他者との関係なしでは生まれてこない、自己に対する肯定的な評価のことであり、社会性の基礎となるものです。といったことから、自己有用感を伴う自己肯定感が重要であると考えます。

ここに記しましたがけれども、平成29年に文部科学省が、「『我が国の子供の意識に関するタスクフォース』における分析結果」を示しております。その中で、「子供たちが他者との協働を通して自分の役割を果たすとともに、集団又は個人の目標を達成した際に、周りの大人から認められることで、成功体験を感じるという一連の取組を継続的に行い、発達段階に応じた対応が重要」と示されています。

それを受けて、教育再生実行会議「第10次提言」ですけれども、「子供たちが自信をもって成長し、よりよい社会の担い手となるよう、子供たちの自己肯定感を育む取組を進めていく必要がある」ということで、具体的な提言としては、多世代交流や異年齢交流等の推進が必要。またタスクフォースで示されましたように、職業体験や社会奉仕活動など、地域と関わりながら学ぶ体験活動が重要と出されております。

そうした中で、今お話ししました第10次提言で、多世代交流、それから異年齢交流が重要ですよということが示されたのですけれども、調べてみますと、実は関わりの対象者が教員、それから保護者、同級生のみにとどまっております、それ以外の人々との交流の有効性ということは触れられていない。それまでの研究では、そういったものではありませんでした。

そこで、昨年度、例えば地域の方々、多様な人々との交流がどれだけ有効性があるかということ、調べてみることにしました。

二つ、調査の目的を示しましたがけれども、家庭や学校以外の多様な人々との交流や承認が、子どもたちの自己有用感や社会貢献意識を高める大きな要因となるのではないかと。そして、コロナ禍でしたので、オンラインによる間接交流も、自己有用感や社会貢献意識を高める一助となるのではないかとということ、このような疑問を立てました。

自己有用感や社会貢献意識が低い中学生の集団に対し、多様な人々との交流活動を意図的・計画的に行えば、コロナ禍のため交流に制限があった昨年度と比べ、今年で言うと「一昨年度と比べ」になります。生徒の自己有用感や社会貢献意識は高くなるのではないかと

いうことで調査をしてみたのですけれども、A中学校は本校です。統合したばかり、昨年度開校したばかりの5月に第1回目の調査を行いました。B中学校は同じく本区の中学校、C、D、Eは他区市の学校を選びました。そして、全学年・全生徒対象に調査を行いました。

調査の方式ですけれども、生徒質問紙、こちらについては、経年の資料がありますので、東京都の「児童・生徒の学力向上を図るための調査」の意識調査の項目を使いました。教員用の質問紙も無記名式で行いました。また各校の校長への聞き取りも実施しました。

実施時期ですけれども、2回取りましたけれども、1回目は、学校が昨年度始まって、まだまだこれからどういうふうに進んでいくか見えない5月中旬から下旬、そして2回目は、学校の教育活動が実際に外部とのつながりを少しずつ持ち始めて、取組を行った11月上旬から中旬まで、そして校長への聞き取りは、昨年11月に行ったところです。

こちらを見ていただきたいのですが、「自分のことを大切な存在だと思う」という質問項目ですが、5月と11月、5月が黄色、11月がブルーで示しました。A中学校は本校です。統合したばかりで、なかなか他者との関わりが、まだ持てていなかった時期ですので、他校に比べると、5月調査は低くなっています。比べて11月調査になると、上がっているという状況です。

なお、赤で囲ったところですが、こちらについては、確認をしたのですけれども、「学校生活の中で、他の人から認められたり褒められたりしたことがある」とに関する肯定的な回答も低くなっていました。

2回の調査とも、実はあつと思ったところが、5月の調査が、都の過去調査、右上に示しましたけれども、都の同じ中学校2年生を対象にした調査よりも上回っているということで、これはなぜだろうと考えたときに、これまでに経験したことがない状況下において、自分を見つめる時間や、家族と過ごす時間が増え、自分の大切さや生命の大切さについて考えることができたことも、かえってこのコロナ禍という中で高くなった要因の一つではないかとも思いました。

二つ目にいきたいと思います。「将来、社会や人のために役立つ仕事がしたいと思う」ということですが、中学校2年生ですが、都の調査では84.9、88.7と、過去2年間にわたって、このような結果が出ているのですけれども、5月はやはり下がっていました。というのは、全く関わりがない時期を過ごしてきたということも大きかったのではないかなと思うのですけれども、ここで11月の調査を見ると、10ポイントほど明和中学校は上がっています。なぜだろうというところですが、それはやはり昨年4月から10月に、各校で交

流活動が再開されて、そして多くの地域の方々と関わる機会が増えたからではないかというふうに思います。

例えば、中野区役所の防災危機管理課の方には、明和中学校の地域の特性がありますので、ハザードマップについて教えていただいたり、また保護司の方もいらっしゃいますけれども、社会を明るくする運動の中で、保護司はどんな仕事をするのだろう。どういうふうに地域と関わっているのだろうということを、総合的な学習を使って教えていただきました。また道徳においては、助産師の方に来ていただいて、道徳授業地区公開講座で生命尊重のお話を全学年にさせていただきました。また、「若年性認知症の方のご家族」とありますけれども、道徳の教科書に「注文をまちがえる料理店」という教材が載ってまして、地域にこの教材の主人公の方のご夫婦が住んでいらっしゃるということで、いらしていただいて、お話を聞くことで、初めて知る若年性認知症、そういう方が地域に住んでいらして、どういうふうに周りでサポートしているか。そうした家族の思いなども、お話をいただいたところです。

そしてこれが都の調査ではなかったものなのですけれども、本調査独自で「多様な人々と交流することは、自分の成長につながる」、ごらんいただいたように、全ての学校でかなり上がっています。5月と11月でこれだけ上がったのはなぜかという、やはり体験活動が多く行われるようになった結果であろうと思います。特に記述式回答では、自己有用感の向上につながる意見や、社会貢献に対する前向きな発言が多数出ました。コロナ禍で教育活動や行動が制限されていたところから、初めて他者との交流が大切であり、当たり前なことではなくて、それがとても重要で、自分の成長につながるのだということを実感して、多様な人々との交流を求めていることが見えてきました。

そうした中で、これを見ていただきたいのですけれども、11月に行った調査なのですが明和中学校、一番上ですけれども、ほかの学校もそうなのですが、「自分の住む地域や社会をよくしたいと思う」「将来、社会や人のために役立つ仕事がしたいと思う」というのは、とても高くなっています。ですけれども、やりたいと思っているのだけれども、「実践状況」と書きましたが、やる場があったかという、それがなかなかできなかった。やりたいと思ったけれども、できなかった。どう取り組めばいいのか、きっかけがつかめないということが見えてきました。

そこからわかってきたことは、やはり子どもたちは他者との関わり、多様な人々との関わり、そこからこちらの社会貢献意識や自己有用感が備わってきているということが見え

てきたところです。と同時に、地域や社会のために役に立ちたいという思いを生かすための場を用意していくことが重要であるということも見えてきました。またオンラインによる間接交流も、確かに直接対面のほうがより効果的だと思いますけれども、こういう状況としては、オンラインも有効だということもわかってきました。また、もともと自己有用感や社会貢献意識が高い生徒にとっても、他者との計画的な関わりというのが有効であるということもわかりました。

教員も交流活動をしたい、させたいと強く願っているのですが、アンケート調査からは、でも、なかなか忙しくて、その時間をとるのが難しいので、交流活動を準備する。お膳立てするためのバックアップが欲しいなと思っているということも見えてきました。また、同じ学校内であっても、意図的・計画的に交流活動を実施したか否かで、自己有用感や社会貢献意識の醸成に差が生じるということも見えてきました。

今後に向けてということですが、多様な人々との交流活動を一層充実させていくことが重要であると、今回の調査から見えてきました。各学校が自主性・自律性を生かして、多様な交流活動を独自に実施することが必要だと思いますけれども、残念ながら、学校ごとにとり組む姿勢や実施状況に差が見られたり、またゲストティーチャーの発掘に苦慮しているところもあります。

昨年度、明和中学校区では、第三者評価が行われましたけれども、第三者評価を通して、お互いにつながりが深まった、明和中学校との連携小学校、4校ありますけれども、そこで一つ関わりということ 키워ワードに、9年間を通して子ども育てていきたいと思いますということが、第三者評価で浮かび上がってきました。今年もこの5校で、同じく関わりをキーワードに、教育活動を進めていきたいと思っています。

このような社会に開かれた教育課程の実現に向けて、仕掛けづくりをこれから工夫していくことが必要だと思っています。地域と学校の連携・協働の充実は、10年後に目指す区の都市像「つながる はじまる なかの」の実現に向かっていくと思いますので、これからも連携小学校4校、そして地域の皆様とともに、地域と学校の連携を進めていきたいと思っています。

私からは以上です。

入野教育長

熊谷校長先生、ありがとうございました。

それでは、続きまして、鷺宮小学校の高橋校長先生からお話をお伺いしたいと思います。

高橋校長先生、よろしくお願ひいたします。

高橋校長

鷺宮小学校の校長をしております高橋と申します。どうぞ今日はよろしくお願ひいたします。

鷺宮小学校、昨年度は140周年記念の年ということで記念式典、それ以外にも記念の行事をたくさん行ってきましたけれども、その中で大勢の地域の方のご支援をいただきながら、また中野区内の企業の皆様からもご支援いただきながら、学校の周年の行事を進めてきた学校でございます。その中で、私自身がまず地域の人と親しくなれたのが、地域との関わりの中では一番大きかったのかなと思っています。

では、そのような中で、鷺宮小学校が取り組んできたものを、今日は本当にわずかですけれども、ご紹介させていただければと思います。

まず、鷺宮小学校とって忘れてならない活動が、音読活動になります。これは、1987年、昭和62年、当時の瀬川校長のころ、そのころから充実させてきて、スタートしているということで、これは言語感覚を育てる音読や朗読、詩の暗唱をすることで、心が豊かになっていく。あるいは詩を鑑賞することで、感動が深まって、また伝えることで、聞く人にも感動を伝えることができる。そんな中で、一番最初には、学校とPTAでつくった音読集「草ぶえ」というのがありますけど、今日は雨がすごくて持ってこられなかったのですけれども、ここにあるのは「草ぶえ」から発展して、今、市販の教材ではあるのですけれども、たくさんの学年ごとの詩集ができていて、それを使って今も音読活動をしていると。

ここで大事なのが、詩の暗唱を聞いてくださる「白鷺音読の会」という地域団体があります。この団体の方が、金曜日の中休み、ちょうど今ぐらいの時間ですけれども、学校に来て、子どもたちが覚えてきた詩を聞いてくださる。「よく覚えたね」とか、「ああ、今日はすらすら言えたね」「また頑張ってきます」という子どもとの会話を通じながら、子どもの心を育ててきた。そんな学校であったということです。

今は残念なことに、新型コロナウイルス感染症の関係でできないのですけれども、昨年度はおよそ1カ月半程度再開しました。そこから発展して、音読活動だけではなくて、放課後の自習教室、それから水曜日、放課後行うのですけれども、勉強したい子が自分で来て、そこで教えてもらう。丸つけをしていただく。あるいは夏休みの自習教室、夏寺。ここにも同じような方が、またさらに団体を広げて、「ことぶきさぎのみや」の方とかの協力を得ながら、子どもの学びを見守っていただいている。そんな活動をしています。白鷺音読の会。

次が、これはアニマルハウス、飼育活動。今、小動物の飼育、子どもの命を守る気持ちが育つのではないかということで話をいただいているのですけれど、本校でも1988年、昭和63年にアニマルハウスが完成しました。周年の資料集からとった古い感じ、白黒で申し訳ないのですけれども、右下がアニマルハウスです。右に今はチャボがいて、左にはウサギを飼っております。

「『いのち』への感性は生命あるものとの直接的なふれあいによって子どもたちの心に刻まれていく」。このようなことをテーマにして飼育活動をスタートしていったと聞いております。

今、登校日の飼育活動は、昨年度までは4年生が毎年担当していました。4年生全員がグループをつくって、中休みに掃除に行って帰ってくると。なかなか4年生、担当だけでは大変だということで、今年度飼育委員会に移行してはどうだろうということで、試みとして、飼育委員会の活動にしています。ただ、土曜、日曜や休日どうするか。飼育動物を飼っていると一番の課題になってきます。餌や水の問題、あと汚れの問題。そこで、月ごとに担当となる学年を固定して、家庭に協力していただく。当番が、週土日が8回あれば、その8回に子どもと家庭を割り振って、親御さんとお子さんと来て、掃除道具を持って行って掃除する。もっと大変なのは、お盆のころ、学校閉庁日ができました。あとお正月、教員もそれぞれ家に帰って、家庭生活を充実させて、その中でどうしているのかということ、年末年始に限っては、またお盆のころには、地域の方々がアニマルハウスの動物のお世話をしますよと。先ほどの音読の会の方であったり、ことぶきさぎのみやの方であったり、そんな方が来て、当番をつくって、一生懸命お手伝いをしてくださることで、生き物を育てることができています。

学校によってはモルモットなんかを、管理職の先生とか教員が家に持ち帰る学校もあるとは聞いていますけれども、やはり飼育の大事さとともに、一方では、どうやって長期休業とかお休みのときに世話をしていくのかというのは、またここは一つ課題になっているのかなと思います。幸いなことに鷺宮は、地域の皆様の協力があって、しっかりできています。

次に、これは今、行えなくなっているのですけれども、クリーン・グリーン運動、地域清掃。まず表彰を受けたことから紹介するのですけれども、平成12年8月に感謝状を、当時の建設大臣、扇千景さんからいただいています。また同じ年の9月、活動奨励賞ということで、東京都知事の石原慎太郎さんのほうからも頂戴しております。

クリーン・グリーン運動、主には学校が始めたと聞いております。実際には平成12年の、20年前ぐらいから始まっているという、すごく長い歴史がある活動です。この活動も、子どもたちが登校途中で、自分の通学路にあるごみを拾ってきて、地域をきれいにしながら学校に登校してくる。こんな活動をしていました。直接的に地域の方が携わるというのは少なかったみたいですが、ただ地域の方に活動を見守っていただいたり、地域の方がそれを応援してくださるので、代々続いてきた。また2世代、3世代にわたって通わせる保護者の方が、自分がやったことを子どもにといいことで続いてきた活動。

ただ、これも令和2年の2月、新型コロナウイルス感染症の流行で、中断を余儀なくされています。逆に、今は落ちているものをやたら拾うのって、衛生的にどうなのだろうとか、課題も多くなっているんで、この後の再開に向けては工夫が必要、または再開しないで、クリーン・グリーン運動を終わらせていくということも考えなければいけない時代だなと思っています。ただ、こういう活動で、地域で育ち、地域で学び、地域をつくる子どもたちが育っていくのだな、そんな学校なのだなというのを感じているところです。

「大好き鷺宮！」という写真を用意しました。これは周年の記念誌の中に、地域の区民活動センターの職員の方がつくってくださいました。これまでに行ってきた地域の活動が書いてあるのですが、写真の背景は鷺宮小学校の校庭を使った盆踊りです。これは地域の鷺宮商明会さんというところが中心となっていくのですが、PTAが関わったり、あるいは教員が関わってお祭りをやっていたと。コロナ禍で、今、このお祭りもなくなっているのですが、昨日、区民活動センターで地域の会が行われたときに、今年度は新型コロナウイルス感染症の関係で無理だけれど、来年度は何があってもやると。感染症対策を万全にして、学校の校庭を貸してくださいという話をされていました。地域の方が集まる場、そして活動する場が鷺宮にあるということで、こんな活動も行っていますということをお伝えしました。あと、餅つきが、左のほうに写真があるのですが、ちょっと小さくて見えないかもしれません。左の真ん中の段は餅つきです。餅つきも鷺宮三丁目町会さんがやって、200人とか300人とか、すごい人数が来るという話を聞いております。施設を貸すこともそうですし、そこに教職員も関わりながら、地域との活動をつくっている学校になります。

最後、地域と連携した活動の再開に向けて、今はコロナ禍にありますので、再開という言葉をあえて使っています。学校の取組を継続していくこと、大事だろうと考えています。明和中学校区、明和中学校と四つの小学校が連携、昨年度、第三者評価検討委員会という場

を通じて、校長が集まって、連携をする機会が生まれました。その中で、この連携は続けていくことが大事だろうと。小学校で見る、中学校で見るのではなくて、小学校から中学校の連続で見る。また中野区の施策にある、生まれたときから、あるいは保育園・幼稚園のころから、ずっと中学校・高校ぐらいまで見ていけたらいいな。その中の一つの間として、小中連携があるのではないのかな。そんなことも考えながら、まずは校長同士、そして管理職とか、さらに教員に広めていって、連携を深めたいと思っています。

あと、学校ごとの地域と連携した活動を継続していく。今は鷺宮の紹介をさせていただきました。でも、同じこの中野区内の中で、地域の防災会と連携して、防災の日をつくって、授業公開の中で保護者を巻き込んで活動をしているという学校もあります。また地区の運動会とか、芸術の中で活動を進めているところ、あとは民生委員さんに算数の指導の支援に入っている学校、たくさん聞いております。自分の地域にどんな人材がいて、何ができるのかな。思う存分、これからも考えていきたいと思えます。

また新たな仕組みづくりとして、これはどこでも言われるのですが、高齢化による地域協力者の減少というのは、どこも避けられずに、ただ若い方もどんどん入れていこうということで、今、鷺宮の白鷺音読の会とか頑張っているし、これから活動を再開する中で、「やっぱり楽しいよね」と思っていただく。「子どもが元気でいいよね」と思っていただくような活動は、これからもつくってきたいと思えます。

あとは、ボランティアの限界というのを書きました。自分自身がボランティア活動で、キャンプとかずっとやってきたのですが、ボランティアする側にも楽しみがあって、そこにいる子どもたちや先生方にとっても、楽しさとかよさがある。そういった相互の関係があって、生まれていくもの。ただ、ボランティアでできる時間がなかったりとか、そういうのがありますから、そこをどう補っていくのかな。そういうところが、ある部分では、支援をいただきながら進めていけたらいいなと。

あとは、それと併せて、保護者・地域協力者の価値観の変化。やはり保護者の方も忙しくなっているのかなと思いますので、そういう時間のない保護者の方にどこをお願いするのか。PTAの問題もあると思うのですが、本当に必要なものは何で、これは続けなければいけない。でも、これを新しい形に変えてやっていかなければいけない。または今のコロナ禍で見直しが始まっている。やめるのも一つの考えかもしれない。そういうところをまた学校として、あるいは教育委員会の支援をいただきながら、学校の一校長としては頑張っていく。また連携しながら、中野区内の学校長としても頑張っていきたいと。そのよ

うな形で、お話を終わらせていただきます。どうも今日は貴重なお時間いただきまして、ありがとうございました。

入野教育長

高橋校長先生、ありがとうございました。

ただいま、事務局、小・中学校と続けて、説明をいただきました。ここで、ただいまの説明や協議テーマに関しまして、教育委員の皆様から、質問や感想なども含めて、ご意見を伺いたいと思います。ご発言はございますでしょうか。

田中委員

両先生、ありがとうございました。地域と学校の連携について、本当に素晴らしい事例も含めてお話しただいて、まだ、よく自分でも十分に理解し切れていないのですけれども、ただ明和中学校の調査研究で、こういった経験をすることで、子どもたちが本当に役立つ仕事をしたというか、自分が地域の中で、地域にいるというだけではなくて、地域に支えられているというのを実感したがゆえに、こういった仕事をしたという思いにつながったのかなど。やっぱり地域との連携というのは大事だなと思いました。

一つお聞きしたいところがあったのは、なかなか実践する場がないという声があったようですけれども、実践する場というのは、具体的にどんなことを、熊谷先生、お考えになっているのか。あるいは、これは学校とか教育委員会として、何かこういった場を考えていけないといけないものなのか。その辺のことをお聞きできればと思います。

熊谷校長

まず一つは、コロナ禍で、本来行われていた地域行事や、それから職場体験等が中止になったことで、関わりたいけれども、関われなかったということが、一つあると思います。それを実践する場がなかったということなのですけれども、あとは先週、本校の3年生が職場体験に行っていました。実は、今日、調査を出した生徒たちなのですけれども、去年は職場体験ができなかったので、職業講話をしていただいて、それはそれで子どもたちはとてもよかった。自分たちが社会の中で育ててもらっているのだという感想が得られたところなのですが、今年度できなかったのも、やはりどうしても子どもたちに職場体験をさせたいという教員の強い思いがありまして、先週行ってまいりましたが、50事業所集めるということはとても大変でした。そして6月の終わりには、74の事業所をお願いしたところなのですが、2年生が今度職場体験に行っていました。そういったところで、交流はさせたいのだけれども、なかなか学校として、毎日毎日電話をして、実際に町会に足を運

び、商店街に足を運んでお願いするのですが、そういったところでなかなか場がないといったところ。やらせてあげたいという思いは、地域の方、あるのですけれども、そこにつながる手だてがなかなか見つからなかったりということで、そんなところで、人材バンクのようなものができてくるといいなどは思っております。

田中委員

実は、私も職場体験を受け入れているのですけれども、一つは、他の区からの中学生を受け入れたことがあったのですけれども、そこは中学校の生徒が直接電話をしてきて、そこで初めて私はこういうことをやりたいのですけれどもという話があったりとかというのがあって、こういうやり方もあるのかななんて思ったのを思い出しました。

もう一つは、今やはりなかなか事業所がないという話にもつながるのだと思うのですけれども、こういった連携が、子どもたちを育てるという意識は、地域の中で、学校とか、私もこういう仕事をさせていただいていますけれども、こういう関わりを持った人は多分かなり意識を持っていらっしゃると思うのですけれども、そういう直接の関わりがない地域の方々が、どれぐらい学校との連携というか、そういったことを思っていたかかなど。そういった仕掛けというのをもし、何か先生、考えていることがありましたら、教えていただけると。

熊谷校長

やはり学校から働きかけるということも重要だと思っていまして、先ほどお話しした様々な方を紹介していただいて、学校にゲストティーチャーで来ていただく。その中で、今子どもたちを地域とともに育てていくということで、地域の子どもを地域で育てていく。そのためにどういう教育活動への参加が必要なのか。また参加される方にとっても、ご自身の経験を生かせる場である、生涯学習の場であるということをお伝えしていくことが必要ではないかと思っております。

また、包括連携協定を中野区は幾つかの大学と、企業と結んでおりますので、そういったところのつながりといったことも必要なのではないかと。いわゆる学校連携プログラムのようなものをつくっていくことも重要ではないかと感じています。

伊藤委員

素晴らしいご発表ありがとうございました。中学校のほうでは、自己有用感ということで、社会との関わりというところを明確にされて、調査結果も出されたというのが素晴らしいと思いましたが、あと小学校のほうも、これまでの伝統ということで、ずっとそういっ

た取組が続いていて、子どもさんたちを育てているということに感銘を受けました。

その中で、ボランティアも含めて、地域に子どもたちが貢献する。地域の方にゲストティーチャーとかで来ていただくということだけではなくて、子どもたちが地域に貢献するという、そこに一歩踏み出そうとされて、いろいろと試みられたところがすばらしいと思っております、しかしながら、そういった場がなかなか難しいというご発言を考えますに、確かに学校教育という枠組みの中で、地域での活動を、しかも子どもたちの自主的な活動を保障していくというのは、「学校教育って何なんだろう」という話にもなると思うのですが、やや限界はあるのかなと感じまして、そういった意味でも、地域に子どもたちが出ていくときのプラットフォームというか、地域と学校をそういった意味でつなぐようなものというのが、これからは大事になってくるかもしれないなと感じました。

そういう意味では、子どもたちの力。先ほど他区では子どもたちが電話をしてきた。私もそういった例を幾つかの区で存じていますけれども、事業所にかえてご迷惑かもしれませんので、実際にそれはどうかというのはありますが、子どもたちが、地域の中で、自分たちができることを探して行って、本当にやるとか、もう少し何か、子どもたちの力というのを使って取り組めるようなチャンスを、学校教育だけではなくて、そういったことが、PTAとかいろんな組織が活躍するところなのかなと思うのですが、何らかつなぐプラットフォームのようなものを活用しながら、力を借りながら、子どもたちの力で地域に出ていく。地域で活動するということが大事だと思いますので、そこにさらに挑戦して、地域の皆さんとともに挑戦していただけるとすごくいいのかなと思いましたし、そういった際に、今回の調査結果、8割ぐらいの子だったのが、9割の子が社会や人のために役立つ仕事が出来たいと思ったり、いろんな方との関わりが自分たちを育てているという実感が持てたという、そういった調査結果も、地域の方にアピールできる部分なのかなと思いますので、力をお借りすることで、こんなに成果がありますということもお示しいただきながら、どうぞ、学校大変だと思いますので、学校の力だけではなくて、地域の方と一緒に、また私たちも一緒に、そういった地域に出ていく活動というのを支持していけるといいなと思いました。

以上です。ありがとうございます。

岡本委員

今のお話の流れで、地域との関わりも多分、もっと充実していくことも必要だと思いますし、それとともに、学校の中でも、いろいろできることはあるのではないかなと考えまし

た。例えば、校則を考え直すルールメイキングなどの取組もありますよね。また授業の中でも、もっと子どもが参加して、自分たちで授業をつくっていくような場面をつくっていくこともできると思います。その中で子どもたちは、自己有用感、自己肯定感、自分で育んでいけるのかなとも思いました。

その際は、中学校になると、どうしても生徒会の皆さんが中心になっていくと思うのですが、生徒会に入らないような、どちらかというところちょっとおとなしめの生徒さんたちも、自分たちでつくっていけるのだという体験ができるような場面を、学校の中で、また地域の中でもご用意いただけるといいのかなとも思いました。

高橋先生にお伺いしたいことがあるのですが、ちょっと話は変わっていくのですが、指導室長のご発表からも、地域の方々のお借りしてとあります。鷺宮小学校さんでも、すごく地域の方々のお借りされているのがよくわかったのですが、どうしてそこまで貸していただけるのかなと素朴に思っていました。あるいは、借りるだけの一方通行でいいのかなとも思っていました。

さっき伊藤委員からもお話がありましたけれども、地域に貢献していくという双方向的なやり取りがあってもいいかなと思うのですが、その前提として、どうして地域の方は学校にこんなに協力していただけるのでしょうか。地域は学校に何を求めているのでしょうか。

高橋校長

地域の方の協力というのは、やはり140年続いてきた学校、そして鷺宮小学校で育った方がまだ地域に残っているというのが強みではないかなと思っています。また地域に戻ってこられる方も、ここ数年、中野区に戻ってくるという方も増加しているのではないのかなと、これは肌感覚ではあるのですが、そういうを感じている中で、やはり自分が育った学校、そして自分を育ててもらった地域という思いが、一番強いのではないのかな。それが2代、3代ではなく、4世代にわたって続くとか、そういう家庭も出てきていることを考えると、この自分の地域を思う気持ち、鷺宮の地域が昔からお祭りをやったりとか、あと子どもの楽しい活動をやってきた。それを経験した子どもが大人になって、今、保護者になっていたり、おじいちゃん、おばあちゃんになって、代々続いてきた。私もいろんな学校を経験しているのですが、これが中野区のよさなのかなというのを思っているところです。多分これはどの学校でも、形は違えども行われていることではないかな。

地域へ出ていくということでは、クリーン・グリーン運動は大きな活動だったと思うの

ですけれども、それ以外にも、例えばお祭りに行ったときに、あるいは餅つきをやったときに、自分の学校、あるいは隣の学校の子どもも来るのだけれど、たくさん来てくれているよ。その子どもたちが笑顔を見せてくれているということ自体が、もう大人にとっての満足につながっていると私は考えております。このようなことでよろしいでしょうか。

岡本委員

ありがとうございます。よくわかりました。学校はやはり地域のものですよね。地域の思いを学校としても行政としても大切に、学校は地域においてどんな存在でいなければならないのかというのを、これからコミュニティ・スクールの取組も始まっていくと思いますけれども、大切にしたいかなと思いました。

以上です。

高橋校長

一つ、ご紹介をさせていただきたいことがあったのを忘れておりました。

学校評議員は、制度としてどの学校にも設置しています。ただ、鷺宮小学校は昔から鷺小を語る会、学校評議員会をさらに大きくしたような組織がありまして、そこには町会長さんだったり、今の音読の会とか、あと読み聞かせの「お話のいす」という会があったりとか、たくさんの方が鷺小を語る会にいらっしゃっていただいて、その中で評議員会とはまた違った形で、子どもの様子や何かの情報交換も行っている。こういうことも、地域が支えてくれている学校としては、大きいことなのかなと思います。

村杉委員

熊谷先生、高橋先生、ありがとうございました。お聞きしなければわからないような地域との取組が、たくさん今日は伺えてよかったかと思えます。

私のところでも職業体験を受け入れておりますが、子どもたちが生き生きと、きらきらとした目で過ごしていかれるのを見ましたら、これからもまた受け入れたいなともちろん思っておりますが、そのようなところもたくさんあるかと思えますが、それをうまくつなげていただくようなことを考えていただければと思えます。

両先生にお伺いしたいのですが、地域の方との取組は、大体どのくらいのペースでと言いますか、行われているのか。今後このようなことに困られるとか、何かありましたら、教えていただければと思えます。

熊谷校長

どのくらいのペースでというのは、一言では難しいのですけれども、年間の授業の中で、

ここは地域の方と一緒に学んでいく。ゲストティーチャーでいらしていただくことが、子どもの教育活動にとって非常に効果があるというところを、それぞれの教科でしっかり決めた上で、さらに他教科はどこでどんな方を呼んでいるのかというようなことも、カリキュラムマネジメントで確認しながらやっております。

ただ、昨年度やっとそうした部分ができきたという状況がありまして、学年によっても若干差があるのですけれども、固まっているというか、例えば明和中学校は、火曜日は人権の日というのを教員が決めまして、火曜日にはゲストティーチャーをお招きして、様々な教科でお話をいただいたり、一緒に授業したりというように取り組んできました。

ですので、大体月に数回ずつは、全ての学年でゲストティーチャーの方がいらしている状況は去年ございました。

以上です。

高橋校長

鷺宮小学校の例ですけれども、先ほど話した放課後の学習教室は毎週、水曜日にやっています。夏寺は、夏休み期間中に決めて、大体5日から10日ぐらい実施しています。

あと小学校の場合、結構地域の方からもうちちょっと広がって、例えば水道局の方の水道キャラバンという出前授業があったりとか、ほかの形で下水道局もあれば、租税教室という形で税務署の方が来たりとか、そういう形でのちょっと地域を広げた形の授業というのは多く展開されています。

一方では、東京土建の中野支部さんが職業体験として、去年は畳のイグサを使って、コースターをつくらうというのですけれども、そういうのは年に1回とか2回、学年によって行っております。

村杉委員

想像していたのよりもたくさん行われているということで、ありがとうございました。

岡本委員

職場体験で、聞いたことがあるお話がありましたので、各学校でももちろん、ただ体験しておしまいではなくて、生徒さんが自分の学びをまとめて、職場に還元したりということはされていると思うのですけれども、聞いたことがあるのは、他の自治体では、生徒さんが、その職場への自分の学びとともに、その職場の改善ポイントみたいなものをお伝えするそうなのです。もちろん受け入れる側の度量も必要なのですが、それによって、自分の体験が自分だけではなくて、先ほどの社会貢献にちょっとつながると思うのですけれども、そ

れが本当に適切かどうかはわかりませんが、一步踏み込んで、こうすればいいのではないかと提案ができる。そこの体験も、なかなかいい学びになるのではないかなと思いましたが、もう既にされている学校もあるかもしれませんけれども、情報提供です。

熊谷先生にお伺いしたいのですけれど、先ほど生徒さんの変容のお話があったのですが、先生方はこの一連の取組を通じて、何か意識の変化はあったのか、なかったのか。もちろん生徒さんの変容については、いろんなチャンネルができたこともあると思うのですけれども、先生自身も生徒さんの変容に関わっている中で、もうちょっとこういうことをしたほうがいいのではないかみたいな、考えが変わったり、取組が変わったりしたことがあったのか、なかったのか。そのあたりいかがでしょうか。

熊谷校長

教員にもアンケートをとってございまして、最初は事業所を探したり、ゲストティーチャーを探すのがなかなか大変だったのだけれども、反対にそこで自分自身が学べたと回答しているんですね。知らないことがこんなにあったのかということと、それから自分も指導の広がりにつながったということも言っております。

実際に、2年と3年と、今年、職場体験、3年生は初めてやったのですが、事業所の方からは3年生ってこんなに違うんですね、2年生と3年生では考え方がこんなに違って、先ほど岡本委員がおっしゃったように、アドバイスというよりは、アイデアをくれたり、また図書館だったのですけれども、区立図書館では、こんなふうに子どもたちに本を紹介したら読んでくれるのではないですかという提案があったと伺っております。

ですので、子どもはもとより、大人も成長する場に、地域との関わりは、なっているのではないかなと感じております。

以上です。

岡本委員

本当に希望の持てるお話だと思いました。子どもが成長するのも、もちろんですが、私たち大人も成長し続けていかないとはいけませんので、私たちも多様な人と関わって、頑張っていきたいと思いました。

以上です。

入野教育長

ありがとうございます。他に委員の方、よろしいでしょうか。

もし、校長先生方から何かあれば。

熊谷校長

本校は妙正寺川の流れるところに立地していますので、防災教育に非常に力を入れております。それに伴って、地域の消防団の方や、それから消防署の方、地域の町内会の方が、子どもたちに、様々地域防災について教えていただく機会を、昨年度とっていただきました。

今年度は、反対に子どもたちも参画して、地域防災について考える場をとということで、地域貢献ということをもう一步踏み込んで、踏み出していきたいと思っております。

以上です。

入野教育長

ありがとうございます。

それでは、ご意見よろしいようですので、協議を終了するに当たりまして、私のほうからもお話をさせていただきたいと思えます。

中野区のよさはと聞かれますと、やはり地域と学校が近いこと、どの学校にもご協力をいただいていることを一つ挙げます。それと保幼小中連携ということが、もう何十年にもわたって、恐らく東京の中でも長い歴史を持っているかと思っております。それが実のあるものに、どんどん時代とともに変わってきているということの、二つをお話しさせていただくことが多いのですが、今日まさに両方のお話をさせていただけたかなと、聞かせていただけたかなと思っております。

教育委員会では、この地域との連携・協働ということに関しましては、また新たな整備、先ほど来、ちらちらと出ておりますが、学校運営協議会などのそういう整備を進めていく考えで今おりますので、これからも地域の方々や保護者の方々に、学校運営に参画していただくことで、学校運営のさらなる改善を図っていききたいなと思っております。今までのよさを生かしつつ、さらにその先へ、これからの時代に向けてということで、教育委員会としても力を尽くしてまいりたいと思えます。

本日は両校長先生からのご紹介があった内容、それから委員方からいただいたご意見も踏まえながら、今後ともしっかりと子どもたちのための学校づくり、地域づくりに貢献していければなと思えますので、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

それでは、本協議を終了いたします。

ここで一旦会議を休憩いたしまして、傍聴者の方々からもご意見などを伺いたしたいと思いますので、それでは会議を休憩いたします。

午前 11 時 00 分休憩

午前 11 時 14 分再開

入野教育長

それでは、会議を再開いたします。

本日は、傍聴されている方々からも、様々なご意見をいただきました。ありがとうございました。ここでお返事することはできないのですが、それぞれきちんと持って帰りたいと思います。

本日開催いたしました「地域での教育委員会」の狙いは、直接、地域に住んでいる方々や、学校の方とお話をする機会を得ることでもあります。地域の現状を知るためには、やはり具体的にお話をお伺いすることが必要であると考えております。本日の会議は、大変有意義なものだったなど、私自身も感じております。今後の教育行政に生かしてまいりたいと思います。ありがとうございました。

それでは最後に、事務局から、次回の開催についてご報告願います。

子ども・教育政策課長

次回の教育委員会は6月3日金曜日10時から、区役所5階、教育委員会室で開催いたします。

以上でございます。

入野教育長

それでは、以上で、本日の日程は全て終了いたしました。

これをもちまして教育委員会第15回定例会を閉じます。

ご協力ありがとうございました。

午前 11 時 15 分閉会